

# 結婚しようよ

2008(平成20)年2月10日鑑賞<梅田ピカデリー>

★★★



監督・脚本＝佐々部清／出演＝三宅裕司／真野響子／藤澤恵麻／AYAKO（中ノ森 BAND）  
／金井勇太／岩城滉一／モト冬樹／松方弘樹／入江若葉／田山涼成（松竹配給／2008年日本映画／120分）

……『半落ち』（03年）、『夕風の街 桜の国』（07年）など社会性の強い問題作が目立つ佐々部清監督が、気分転換として（？）趣味の世界へ！「家族そろっての夕食」はすばらしいが、見切り時が大切！ 家族がバラバラ……？ それとも自立……？ 拓郎ソングを楽しむには、そんなシンプルな物語で十分だが……。

## 悪くはないが、少し安易すぎ……？

『カーテンコール』（04年）で、個人的にお知り合いになった佐々部清監督は、プロデューサーの臼井正明氏とともにすごく魅力的な人物。そして、監督としての才能も太鼓判。しかし、私の独断と偏見による作品の良し悪しの評価は当然別。

それによると、上出来の作品として、『カーテンコール』は5点（『シネマルーム7』296頁参照）、また『夕風の街 桜の国』（07年）も5点（『シネマルーム15』261頁参照）。他方、『半落ち』（03年）は4点（『シネマルーム4』230頁参照）で、『四日間の奇蹟』（05年）も同じ出来で4点（『シネマルーム8』173頁参照）。しかし、『出口のない海』（06年）は出来が悪く3点（『シネマルーム12』223頁参照）となっている。

そんな佐々部監督は1958年生まれだから、彼が吉田拓郎の大ファンだということは十分理解できる。そんな彼の学生の頃からの夢を実現させたのが、吉田拓郎のヒット曲をそのままタイトルにした映画『結婚しようよ』だ。佐々部監督がいつも映画で描くのは、山田洋次監督と同じく家族愛。そして、この映画は『結婚しようよ』というタイトルにピッタリマッチした家族愛を描くもので、悪くはないが、少し安易すぎ

……？

## 今ドキ、毎晩家族で夕食という風景は……？

この映画の主人公である香取家の主人香取卓（三宅裕司）は不動産会社に勤める平凡なサラリーマン。住宅ローンの残りがいくらあるのかは知らないが、彼は結構立派な郊外の一戸建ての家に住み、美人妻の幸子（真野響子）と、大学4回生の長女詩織（藤澤恵麻）、大学2回生の次女歌織（AYAKO）に囲まれて、「中流の上」程度の恵まれた生活を営んでいる。

この香取家のルールは、卓が結婚以来30年間守り続けているという、夕食は家族4人がそろって食べるということ。映画だけでは夕食のスタート時間や、夕食に費やす時間など家族4人の夕食タイムの実態は明らかではない。しかし、週1回、あるいは月1回のルールならまだしも、毎晩こんなルールを守ることなど今ドキ到底不可能。

『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）にみる昭和30年代は、日本国民がそろって貧乏だったから、今のように家族そろって外食などというのは夢のまた夢。したがって、家族そろって夕食を食べるしかなかったが、モノが豊かになり生活習慣が40年前とは一変した今、家族4人が毎晩そろって夕食を食べるなどという風景は、今では天然記念物……？

そう評価するのが当然だから、今なおそんな家族の夕食のあり方を押しつけている卓の生き方には大いに問題あり……？

## 家族はバラバラ……？ それとも自立……？

どこの家族でも子供は小さい時は家族と共に生活し育っていくが、いつのまにか大人になり家を出ていくもの。それは大人としての自立だから、家族がバラバラになってしまうというものではない。しかし、どうもこの映画の主人公卓を見ていると、それが全然わかっていない様子。

長女詩織は今、手打ちそばの修業をしている木村充（金井勇太）と恋に落ち、大学を卒業したら充と結婚すると宣言。またもともと学業よりも音楽活動に力を入れていた次女歌織は、カオリ&スリーキャンディーズの活動を本格化したいと宣言。さらに妻の幸子まで「いつまで夕食をご一緒できるかわかりませんよ……」と恐ろしい発言を……。

しかし、これを「家族はバラバラになってしまった」と嘆くのはナンセンス。子供や妻の自立が始まったと理解し、オヤジ自身も自立しなければ……。

## 友達っていいもの

佐々部監督は私より9年後輩だから、1967年という激動の時代に学生生活に入った私に比べると、彼は1970年代後半という、より豊かで平和な時代に学生時代を送ったはず。したがって、学生運動とは無縁……？ しかし逆に、この映画に登場するような、ゆうらく荘で共に暮らしていたギターデュオの片割れ榊健太郎（岩城滉一）や2年後輩の丸山勉（モト冬樹）など、遊び(?)を通じた親友がいたよう……。

もっとも、いくら学生時代の親友でも、社会に出て全く違う道を歩み始めると接点がどんどん少なくなっていくのが常だが、何かのきっかけで再会することはある。卓と榊、丸山が再会できたのは、15年前に脱サラした榊が開店したライブハウス「マークII」のオーディションを歌織が受けにいったのがきっかけ。人生、どこにどんなドラマが待っているかわからないものだ。

もちろん、再会した時の2人の価値観は全く異質。したがって、歌織の将来と香取家の（食事の）あり方を見る目も全く異質。さあ、そんな中、卓の価値観は少しずつ変化していくのだろうか。それがこの映画の見どころだが……。

## 松方弘樹がおいしい味を

定年退職したら夫婦そろって田舎の家で畑を耕しながらノンビリと田舎暮らし。そんな老後の人生設計を描いている人は少なくないだろうが、それは意外と難しいはず……。

しかし、今63歳の菊島喜一（松方弘樹）とその妻靖代（入江若葉）は、卓が紹介した田舎の一軒家がえらく気に入り、見学日に即決。弁護士としてはこんな決め方はお薦めできないが、菊島家の場合は、契約後も出入りしてくれる卓の親切もあって、この決断は大成功だったようだ。

『茶々一天涯の貴妃（おんな）』（07年）では若き日の織田信長をカッコよくキリリと演じた松方弘樹が、この映画では老人メイクでいい味を……。チョイ役だと思っていたら大まちがい。卓の人生の先輩としてアドバイスする姿もカッコいいし、ハイライトの結婚式で流す涙もすばらしい……？ そんな意外な松方弘樹の演技に注目！

## 藤澤恵麻は、Wink の相田翔子そっくり……？

人間主義、家族愛をテーマとする佐々部作品の特徴は登場人物が善人ばかりで悪人がいないことだが、娯楽性を徹底させたこの映画はそれが顕著。香取家の2人の娘も今ドキ考えられないような実に素直ないい娘たち。

若い人たちは中ノ森 BAND でボーカル兼ギターを担当している AYAKO に注目だろうが、私は料理が大好きでおっとりした持ち味のいかにも長女の雰囲気をもった詩織役の藤澤恵麻に注目。充との結婚を父親に願い出る姿も今ドキありえない風景だが、私が注目したのは、なぜかその顔が Wink の相田翔子にそっくりだということ。例によってこれは私の勝手な思い込みかもしれないが、誰かそう思う人はいない……？

## 難しく考えず、拓郎ソングをタップリと

この映画を楽しむコツはあれこれと難しく考えないこと。それはわかっているのだが、なかなかそうスナリいかないのが私の辛いところ……？ しかし、映画の節目節目に流れてくる拓郎ソングや会社帰りの卓が駅前広場で聴きながら一緒に口ずさむストリートバンドの拓郎ソングを聴いていると、学生時代にそのリズムや歌い回しに馴れている私には心地よいもの。さらに、カオリ&スリーキャンディーズの歌織の歌唱力も大したもの。

しかして、ハイライトとなる詩織と充の結婚式で、卓がギターをボロン、ボロンと弾きながら歌う『結婚しようよ』の感動度は……？ この映画は、もうそれだけで十分……？

2008(平成20)年2月16日記